

飯塚伊賀七

「からくり伊賀七」と呼ばれた発明家 つくば市



(つくば市谷田部資料館提供)

宝暦12年(1762) - 天保7年(1836)。筑波郡谷田部新町村〔つくば市谷田部〕生まれ。代々名主を務める家柄で、伊賀七も寛政から天保にかけて名主を務める。数理に明るく、発明心に富み、職務のかたわら、建築や機械類の発明と研究に打ち込む。そして、五角堂や鐘楼などを設計し、酒買人形や大時計・飛行機なども作ったことから、「からくり伊賀七」と呼ばれる。特に、大時計は、「伊賀七の時計」と呼ばれ、飯塚家から鳴り響いてくる太鼓や鐘・笛の音で時刻を知ったという。「谷田部に過ぎたるもの三つあり、不動並木に広瀬周度(蘭学者)、飯塚伊賀七」と言われるほど、人々から慕われた。

飯塚伊賀七は、筑波郡谷田部新町村〔つくば市谷田部〕の代々名主を務める飯塚家に生まれました。飯塚家は、広大な田畑や山林を所有する農家で、恵まれた環境の中で育ちました。

ある日、飯塚家の母屋が近くから出た火事で焼けてしまいました。そこで、伊賀七は、自ら設計してたちまち母屋を建て直しました。この母屋は、代々使われていましたが、残念ながら、昭和25年(1950)に取り壊されてしまいました。その時、隠し部屋があることが発見され、長い間住んでいた家族もびっくりしたといえます。

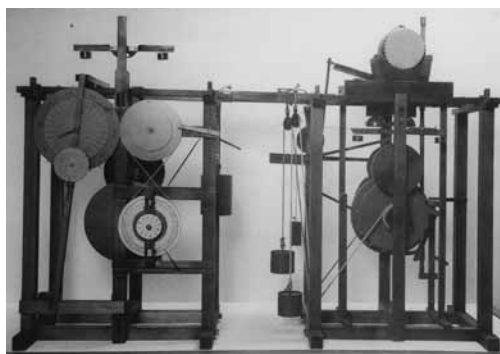
(自分の力で新しいものをどんどん生み出し、世の中の人々の役に立ちたい。)

こう考えた伊賀七は、名主となった後も、名主としての仕事はもちろん、発明にもさらに力を注いでいきました。伊賀七が次に手がけたのは、五角堂でした。一見、かやぶきの普通の物置のようですが、よく見ると屋根は五角すいで、中央の柱から傘の骨のように10本の小柱が放射状に出ています。中には、歯車仕掛けの米をつく機械が取り付けられていました。この五角堂は、当時からかなり話題になりました。

また、伊賀七は、下総国相馬郡布施村〔千葉県柏市布施〕の布施弁天の鐘楼などを設計したといわれています。屋根が四角形で、鐘をつる胴体は円筒形、土台は八角形というめずらしいものでした。当時、発明や建築の研究で有名になっていた伊賀七は、「からくり伊賀七」と呼ばれており、このような遠方からも設計の依頼を受けたのでした。

(多くの人々が私の発明を期待している。人々にもっと喜んでもらえるような発明をしたい。)

伊賀七の発明は、初めは自分の興味や関心を満たすためでしたが、やがて人々に喜びを与えるためのものへと変わっていきました。



からくり時計の模型(茨城県立歴史館蔵)

同じころ、伊賀七は自分の敷地内に時計堂を建て、この中に設置する大時計を設計し、文政5年(1822)に完成しました。現在残っている大時計の歯車は、一個が10kgもある大きなもので、伊賀七自ら指導して作らせたといわれています。大時計は、朝夕の鐘や太鼓、笛を合奏させて村内に時刻を知らせ、同時に時計と合わせて自宅の門の扉を自動で開け閉めさせることができました。「伊賀七の時計」と呼ばれるこの大時計は、村民に大いに喜ばれたことでしょう。

天保4年(1833)は、不順な気候と暴風雨が関東地方を襲い、大凶作の年でした。それを見た伊賀七は、自分のもつ技術を活かして、農業用機械の製作に取り組みました。そして、歯車と重りだけで製粉と精米を行う機械を作りましたが、この機械は水車や風車のような装置を用いなくても、どこでも使用できる自動機械でした。(この天候と大嵐で農民は疲れ切っている。私の「からくり」の技術を農業生産に結び付けることはできないだろうか。そうすれば、天候に関係なく、農業が行えるし人々の生活は今よりもっと楽になるだろう。)

伊賀七は、「農業生産の自動化」という夢に向かって研究を続けました。

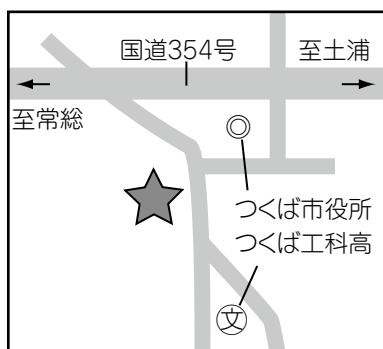
しかし、天保7年(1836)の大飢饉の年、伊賀七は75歳の生涯を閉じました。それでも、人々のために発明と研究を続けた伊賀七は、「伊賀七さん」と呼ばれるほど、現在も地域の人々から慕われているのです。

ゆがりのスポットに行ってみよう

五角堂と和時計

所在地 つくば市谷田部1945

内容 この五角堂は、地元に残る唯一の建造物で、「からくり伊賀七」を象徴する貴重なものです。和時計などの発明品は、谷田部郷土資料館(谷田部4774-18)で展示されています。



おもな 参考文献

『郷土の先人に学ぶ』(茨城県教育委員会・1986)

『飯塚伊賀七』(谷田部町文化財保存会・1963)